

Ryuzo Kuroki and Yusuke Ando (eds)

*The Foundations of Political Economy and Social Reform*

– *Economy and Society in Eighteenth Century France*, London, Routledge, 2018

### この著作の意義

同シリーズ Routledge Studies in the History of Economics で 2003 年に出版された坂本、田中編 *The Rise of Political Economy in the Scottish Enlightenment* との関係。

- ・ホント、イグナティエフ編『富と徳——スコットランド啓蒙における経済学の形成』が 1983 年に出版されて以降、「富と徳」の複雑な関係に関する問題から経済学的内容が失われ、むしろ純粋に政治学的、哲学的観点からの富と徳の単純な文法が、国際的な水準での議論の焦点に。
- ・そもそも『富と徳』の寄稿者は、政治思想史の研究者が占め、経済思想史研究者がほとんどいなかった。結果として「富か徳か」「自然法学か古典的共和主義か」といった単純化された二者択一の危険が、著作自体のなかに潜み込むことは避けえなかった。(cf. Editors Introduction, p.1)
- ・最後に置かれた水田論文の意味。市民社会が欠落していたがゆえに、その内実を追求することに重要な意味があった明治期以来の日本の経済思想史の伝統。スミス研究での『道徳感情論』、さらには「富と徳」の問題に対する長きにわたる関心。18 世紀スコットランドの思想家と関心が共通。
- ・問題枠組が、ヨーロッパの学問状況によって規定されてきた昨今の傾向。社会科学の役割を改めて考える上で、独自の問題提起をし得る日本の学問的背景と蓄積。
- ・黒木、安藤編の本著作では、思想史研究においてケンブリッジ学派が支配的なイギリスだけではなく、フランスをも考慮することの意味。経済学の主流の陰に隠れた系譜。政治学、歴史学も含めた学問間の関係性、さらには経済学の相対化。

### 第 1 章「最初の市場バブル——ジョン・ローとリチャード・カンティロンの観点から」（アントイン・マーフィー）

#### 経済学史におけるローとカンティロンの異質性

- ・2008 年のリーマンショック以降の文脈で、歴史的観点からのバブル再考の流行。
- ・モンテスキュー、ヒューム、スミス、マルクスに至るまで、ローに対する非難。貨幣と金融の世界を理解しなかった人物としてのローのイメージの固定化。

⇒しかし、彼らにおいて、バブルを引き起こした金融的革新それ自体、あるいは、こうした革新が導入された理由と背景に関する検証が欠落。他のほとんどの経済理論家と異なり、ローは自らの理論を実践に移す機会を与えられたことの意味。

## ミシシッピ計画を巡るローとカンティロンの対決

ミシシッピ計画：国家債務証券を会社の株式と交換することによる国債の償還計画。「経済における貨幣の性質と役割」に関する18世紀最大の論争の一つ（p.7）。

⇒ヒュームとスミスの影響下にある近代の経済学者たちによるローとカンティロンの周縁的な位置づけ。経済学の系譜の批判的な問い直し。

## カンティロン『商業一般の本性に関する試論』

単に、1720年の市場バブルという特殊な状況だけではなく、以降の時代も含めた金融市場バブルの現象一般の原因と、それに対する対応の可能性を見定めるための枠組を提供。⇒著作の特異性：すべてが価格の調整機能によって決定されるのではなく、様々の企業家（生産者、卸売業、小売業など）が価格決定プロセスに重要な役割を果たす。

カンティロンの想定する経済構造には、費用や遅れなしに価格を決定する市場取引（market transactor）のメカニズムは存在せず、「見えない手」（スミス）や「競り人」（ワルラス）の想定もない。⇒むしろ、企業家は、市場の状態を見定めるために自らの専門知識を活用。「市場が機能するのは、企業家たちの活動によってなのである」（p.16）。

⇒「企業家」の役割に注目したのは、18世紀ではカンティロンとケネー、19世紀初頭ではセイ、20世紀ではシュンペーター。彼等を除き、それを重視した経済学者はいなかった。

- ・カンティロンの固定賃金で働く労働者と企業家による経済の説明。後の経済学者たちは、その観点を考慮しないことで、労働者と資本家のマルクスの区別に対抗する重要な機会を失った。
- ・企業家指導型市場の世界を提示することで、金融経済に必要とされる貨幣の総量の分析を展開。そのための所得循環モデル。：ローは『貨幣と商業』で所得循環の基礎的モデルを提示、そのカンティロンによる展開、ケネーの『経済表』における洗練。

## 楽観論者、ロー

当時のフランスにおける貨幣の欠乏と巨額の国家債務という二重の問題に直面。⇒金属貨幣の制約を逃れ、貨幣供給の増大と利子率の引下げによる経済の活性化を提案。

## 悲観論者、カンティロン

- ① 金融操作による貨幣量増大の割合は、実体経済の規模と成長に相応する必要。
- ② 金融技術の革新がもたらす利益を理解していたが、その無分別な革新の危険も認識。（運用する側による濫用の危険。）
- ③ 外国からの過剰な借入を回避する必要。

⇒なぜ経済理論家たちは、見えない手やワルラス的な「競り人」に関する考察に時間を費やし、企業家の役割にはほんのわずかにしか関心がもたれなかったのか、という問い。古典派経済学の理論枠組には収まりきれない経済現象の複雑さ。もう一つの経済学の可能性。

## コメント

マーフィの試みは、経済学の内部での新たな系譜の模索として評価できる。しかし、他方では、モンテスキュー、ヒューム、スミス等の間でも、ローを批判する際の観点は異なっているのではないか。政治と経済の接点を改めて考察する重要性もミシシッピ計画の出来事は提起しているのでは。

## 第2章「商業による平和か、あるいは交易の嫉妬か：ジャン＝ベルナール・ルブランにおける18世紀半ばのグレート・ブリテン」(川出良枝)

### 1) ルブランにおける現実主義的な「コスモポリタニズム」の理念

**議論の文脈：**1730年代後半の商業平和論の理想が維持し易かった時代から、七年戦争(1756-1763)勃発後にかけてルブランはどのように思想を一貫させ、あるいは洗練させたか。そこでのヒュームの思想的交流関係。

#### 『あるフランス人からの手紙』(以降『手紙』)(1745)

・1737年から38年のブリテン滞在経験をもとに書かれ、1745年に出版。祖国愛と両立するフェヌロンの人間性の普遍的道德性の原則を支持。しかし、平和と戦争に関する抽象的な理念よりも、フランスとイギリスの具体的な関係性への関心。(祖国への愛無くして、世界の市民とはなりえない、という現実的感覚。)

⇒両国を比較し、偏見なしに各々の特殊性を理解することで、執拗な国家的憎しみを除去する試み。「自由の国」、「ある種の共和政体」をもつとされるイギリスと君主政フランスとの比較。

#### イギリスに対する公平な評価：フランス君主政にとって模範となる経済システム

・混合政体であるイギリスの国制は、表面的には「共和政の完成形」と映るが、それに対する疑念。国内政治の党派対立に対する批判。(『手紙』内のモンテスキュー宛書簡では、共和政では専制が支配し、君主政では公正が支配するとの見解。「不協和の調和」との違い。)

⇒そこでの政治よりも、むしろ経済政策を評価。生産物が容易に商品化され、商業発展の原動力に。特に、国民全体の生存を可能にする農民層を最重要視。農村の貧困を軽視するフランスの政策に対する批判。(フェヌロンなどと共通。)

**フェヌロンとの相違：**ルブランは、奢侈を擁護し、それを「余分なものへの嗜好」と定義。「誤って理解された質素の観念」は、むしろ商業を破壊。「ルブランにとって、商業が政治における最も本質的な側面である。それというのも、商業は、戦費を支払い、平和時には富を保持させるからである。」(p.30)

⇒商業発展のために、商人に対する名誉の賦与を提案。

#### 『手紙』での商業に関する二つの観点。

- ①商業は国家の制御の及ばない相互依存の体系。
- ②商業は国家権力を増大させる有効な手段。

⇒商業と戦争に関して、ルブランの両義的立場を反映：商業は、戦争に導く唯一の動機にも、平和時における唯一の目的にもなる。(1755年の秋、ルブランのヒューム宛書簡での賞賛との一貫性。)

## 2) ヒューム『政治論集』の仏訳以降のルブランの観点の変化

ルブランは、『政治論集』を1754年に仏訳。この著作から、商業発展とブリテンの政治的自由の密接な結び付きをより明確に認識。フランスの君主政体と社会構造は、共和政ほどに十分に商業を発展させることができないのでは、という問い。⇒商人への名誉の賦与が、表面的な解決に過ぎないものとして映るように。

### 『イングランドの愛国者』(1756)

- ・世界貿易での覇権を獲得しようとするブリテンの野望に対する批判。
- ・ブリテンは、フランスにとっての模範ではなく、フランスの経済システムの改革の障害に。このルブランの困惑に根拠があることを証明した七年戦争の勃発。

### 戦争勃発に続くルブラン、フージュレ・ド・モンブロン、そしてヒュームの反応

- ・フージュレが1750年に出版した『コスモポリタン、あるいは世界の市民』での「世界市民」の概念は、祖国愛の発想を完全に否定(フェヌロンやルブランとの相違)。
- ・しかし、七年戦争勃発後の1757年、フージュレは『親英熱に対する予防』でルブランによるイギリス称賛を批判し、立場を劇的に変化。

⇒川出の評価：具体性に欠く「世界市民」概念は、共感と嫌悪が容易に反転する。⇒実際には、戦争勃発後のフージュレのイングランド批判は、かつてルブランが既にしたものの繰り返し。1758年版『手紙』に加筆された「序言」でのルブランの返答。「フランス同様、イングランドにおいても勇気があり衡平な真理への情熱は、自らの偏見からしか判断しようとしなない人々の気に入らない。」(p.37)

### 結論

1758年の『手紙』の「序言」は、商業の嫉妬を分析し、『愛国者』での以前の議論に取って代わる。イングランドが受け入れたヨーロッパ諸国間の勢力の均衡は「各国の間で正確な均衡を維持することよりも、その排他的な商業の力により、全ての諸国を完全な依存状態(dependence, 川出の原文ではindependence)に置くこと」に存した。(p.38)

ルブランは、1745年の『手紙』の時点で、すでにブリテンとフランスの間の「商業の嫉妬」に言及。しかし、真剣な問いとしてこの問題に向き合い始めたのはヒュームの『政治論集』を読んで以降。ルブランの長きにわたる関心の総括的な位置にある1758年の「序言」。

⇒自らの「偏見」から距離を取り、公平な立場からイングランドを評価しようと試み続けたルブランの現実主義的「コスモポリタニズム」の実践の軌跡。

### コメント

社会・経済思想史研究は、ヒュームの「貿易の嫉妬」の執筆に関して、「富国・貧国論争」の文脈でのジョザイア・タッカーとの論争を重視。これに対して、川出の議論は、モンテスキュー、ヒュームらが

重視し、国家間対立の在り様を粹付ける「偏見」、「嫉妬」、あるいは「祖国愛」も含め、政治的イデオロギー分析の側面を切り出し、それが商業関係ともつ実際の緊張関係を提示している。

「不協和の調和」に関して。モンテスキューは、古代ローマ、近代イングランドを含めて、対立が調和を生み出すという一般的命題を提示したというよりも、むしろそれが成立する条件を問うたのでは。同様に、国際関係に関しても、商業が平和に貢献すると考える際には、その商業が、相互の必要に基づく交換を想定した場合に限られる。問われるのは、植民地貿易も含めて「商業」が「略奪」と区別されるのはどこからなのか、なのでは。ルブランが称賛したとされるヒュームの言葉「これからは、商業だけがヨーロッパにおける平和と戦争の原因になる」、この言葉がもつ意味を、特に 18 世紀後半の思想家たちに関して、さらに掘り下げることの一つの論点になるのではないか。(部分的にはアンソニー・パグデンなどが議論。しかし帝国主義批判の文脈に押し込められ、国内政治、社会改革案との関係の具体的問題が捨象される。)

## 第 7 章「奢侈と勤労：フォルボネにおける初期産業主義」(米田昇平)

### 1) フォルボネの先行者、ヴァンサン・ド・グルネ (1712-1759)

- ・ケネー『経済表』以前のフランスでの経済学研究の活発化に際して指導的地位にあったヴァンサン・ド・グルネ (1712-1759) に対する関心の近年における増大。
- ・名誉革命以降のイングランドの経済的上昇。対して、フランスの確実な経済発展を妨げたと考えられたコルベールの独占と商業規制(重商主義)。グルネは、対外的な圧力からの保護しつつも、自国産業間の自由競争を主張。イングランドとオランダに対抗するための生産主義(Productivism)。
- ・1750 年代末「ケネーが颯爽と登場し、グルネーは静かに退場」(津田内匠)。テュルゴーやモルレは、フィジオクラシーに傾斜。これに対して、フォルボネ (1722-1800) は、勤労を「国民の奢侈」に結び付け、産業が発展する場として「産業社会 *société industrielle*」の概念を作り出した。⇒フィジオクラシーへの対抗的立場。ケネーの陰に隠れた、フランス経済学の系譜。

### 2) 相互依存の体系：欲望と生産の相互関係

- ・農工分業の重視。しかし、農業生産がこの相互依存関係の基礎。相互関係の紐帯となる商業の根本的重要性。農業生産物の価値も、商品の循環によって、生産と消費が結び付けられる仕方に依存。
- ・生産者は同時に消費者でもある。欲望の相互性は、生産の相互性を伴う。したがって、余剰生産物の交換は、欲望の欲望に対する、あるいは効用の効用に対する交換を意味する。(p.117) 個別の消費者の欲望の段階的な相違。絶対必需品から奢侈品へと至る必要性の階段。「相互依存の体系は、段階付けられた欲望の体系であり、それは農業生産物の余剰と増大とともに拡大する。」(p.117)  
⇒ボワギベールと比較した際、フォルボネは、その奢侈理論に基づいて、消費が生産を規定することを二つの仕方でより明確に示す。①消費者の欲望が、労働への主観的誘因を与えること(欲求の相互性)、②生産物の消費需要は、雇用と生産の客観的な原因(生産の相互性)となる。
- ・大規模な消費を奨励するためには、商品が可能な限り安くなければならない。土地生産物や原材料の

豊富、職人間の競争、労働の節約、安価な輸送費、低利子率。⇒最も重要なのが自由競争。独占、特権、職人見習いの伝統を批判。

⇒ケネーの「高価格による豊富」を暗に批判し、フォルボネは「低価格による豊富」の理論を提示。スミスの「一般的富裕」の観点の先取り。

⇒しかし、食料の低価格と、耕作を放棄させ、製造業を崩壊させる低価格は区別されなければならない。農民の利益を保証し、〔農業生産量の激減による？〕労働賃金の上昇に結び付かない「中庸な価格 moderate price」の提案。⇒そのためにも、王国内における穀物の需要と供給を調節するための穀物倉庫を作った上、その枠内で王国内の穀物の流通、そして穀物輸出の自由化を提案。

### 3) フォルボネの平等主義的な社会構想の特徴

①相互に依存する生産と消費を増大させるために、収入の平等な配分。少数者の超富裕層における貨幣の退蔵の弊害を批判。②食料供給と人口増大のための、土地の可能な限り平等な配分の提案。

⇒ケネーが、大規模農業によって農業生産を高めようとしたのに対して、フォルボネは、「所有者兼管理人」による小規模土地所有を擁護。ルソー批判：奢侈を否定して、牧歌的な生活に戻ることは「自然の秩序に由来するもの」と「所有の強制された移転から生じるもの」を混同することを意味。フォルボネは「所有の強制移転」と同時に、金融業者による高利、重税からの独占的収入を批判。したがって、富と土地を可能な限りの平等な分配が推奨できても、それは所有権の自由の原則を侵害してはならない。

### 4) グルネとフォルボネの政策案に関する共通点と相違

・フォルボネとグルネの共通点。国内の自由主義と国外の圧力からの保護の釣り合いの模索。しかしグルネーが「障壁」(航海条例)により国内産業の対外的競争力を維持しようとしたのとは異なり、フォルボネは、国内産業を保護、育成し発展させること貿易差額の優位を獲得することを望んだ。

⇒フォルボネは、フランスが他のヨーロッパ諸国と比較しても農業国として認識。しかし、ケネーやミラボーが主張するようには、土地所有者により先導される農業社会は必然的な帰結ではない。→彼が追求したのは、フランスにイギリス型の「産業社会」を発展させ、組み入れるための現実的な条件。独自の「産業社会 *société industrielle*」観を提示。フォルボネの重商主義批判の根拠。

### 結論

・1786年の英仏商業協定において、フィジオクラットの自由交易論を推進したデュポン・ドヌムールが失敗し、その非現実性が明確になった際に、その批判者たちが依拠したグルネー・サークル、特にフォルボネの議論。

⇒革命以降のフランス産業主義は、フィジオクラットの土地所有者主導型社会とルソーの平等主義の双方の批判を通じて生み出された。そこで重要な基礎となったフォルボネの産業保護主義と「産業社会」の新たな概念。やはり、18世紀後半の社会構造の具体的変容を無視できないのでは。

### コメント

126 頁では、モンテスキューは階級秩序を維持するために一般民衆のみが奢侈を享受すべきとした、

あるいは、売官制は上位の中間層に対する商業への奨励となった、とされる。むしろモンテスキューは、富の不平等の程度に応じて、貴族は奢侈を享受すべきだと考えたのではないか。(ジョン・ローを念頭に置いた、恣意的な金融操作による富の急激な移転は、身分制秩序、さらに制限政体も破壊するとして批判してはいる。)

フォルボネも富裕者が消費を止めることで、国が生命力を失うことを恐れる。1767年の『経済の原理と考察』では、過剰な奢侈に対する批判は、高利子や重税に由来する収入による「不規則な奢侈」に限定されている。こうした限定は、奢侈を享受する一般民衆の増大に対応しているのではないか。また、1754年の『商業要論』と1767年の『原理と考察』の間に、フォルボネ自身は、その構想の現実性に関して認識をより確かなものにしたなどの変化はあったのか。

ムロンが、消費欲求と勤労を結び付けることができず、働かない富裕者における奢侈の効用を認めたに過ぎなかった。これに対して、フォルボネの「国民の奢侈」の理論的観点では、勤労貧民と富裕な消費者の分裂が解消されている。このことは、ムロン、モンテスキューが想定したフランスの社会構造から、18世紀後半フランス革命期にかけての漸次的な変容を理解する手掛かりとして理解して良いのか。

## 第8章「ルソーの有徳な経済学」(クリストフ・サルヴァ)

### 多様なルソー像

- ・自由主義者、全体主義者、資本主義肯定、社会主義者など、様々な立場の思想家たちによって肯定。
- ・諸々の著作間の一貫性の欠如。最大のものが、市民社会における経済的、社会的不平等に関する問題。  
⇒サルヴァは、不平等はルソーにとって最優先の問題ではなく、その体系の最終的狙いは政治的なものではなかった。個人的な幸福の問いに関連する場合にのみ、政治制度の形式は重要性をもつ。

### 経済思想の歴史におけるルソーの位置

ルソーは、貨幣、奢侈、課税に関して議論しているが、経済学批判を試みたのではなかった。代わりに経済学者、哲学者が考慮すべき幸福に関する十全な理論を展開。⇒関心の中心は道徳的腐敗の批判。

ルソーの政治哲学を分析する二つの方法。

- 1) 「楽観的観点」: 政治的諸原理に対する規範的重要性を付与。
- 2) 「悲観的観点」: 近代社会に、古代の徳に基づく市民権を実現することの不可能性を十分に認識。その上で、人間にとっての真の幸福の追求に限定。⇒その目的に反しない限りで経済思想を許容。

### 『エミール』における「市民 **civil man**」と「人間 **natural man**」の区別。

『社会契約論』での「市民」論(個別意志の公共善への従属)、『エミール』(1762)での人間論の区別。

⇒サルヴァは、1755年の『政治経済論』から1762年の間にルソーは考えを変えたとする。

### 近代社会における幸福と徳

社会に入りながらも、市民感覚(citizenship)を獲得することに失敗すると、快楽を幸福と、優越感

を快樂と混同する。⇒『人間不平等起源論』自然状態を離れることで落ち込む、漸次的な自由の喪失。つまり自己欺瞞と「見せかけ appearances」の世界。

### スタロバンスキー、トドロフ、ジュネットらに対するサルヴァの批判

・サルヴァは、「生活の、あるいは幸福の技法」が『エミール』や『新エロイズ』で提案されていたとする。ルソーの政治、道徳哲学において本質的でありながら、過小評価されてきた側面。ロックやコンディヤックの感覚論の影響。

⇒功利主義とルソーの相違：単なる苦痛と快樂の加算や均衡とは異なり、自然が意図するところを知るべく、「幸福な」人間になるための教育が必要。

### 自給自足、奢侈、そして社会的不平等

自給自足の発想が、ルソーの体系で占める位置。それが人間を解放する（教育の役目）からではなく、むしろ、人間の福祉に貢献するから。しかし、近代社会では完全な自給自足は幻想に過ぎず、商品交換なしで済ませることはできない。⇒貨幣を最小限にすることの提案。また個々人に関しても、幸福へのカギは道徳的徳、つまり後悔することなく、すべてを放棄できる幸福。

古代的な市民権が実現不可能な近代においても、自由（社交の世界の「見せかけ」の基準に依拠せず、自然に従って美の基準を確立し幸福になること）と不平等の存在は両立可能。

### 結論

19世紀における経済学の歴史の影響下で、18世紀の「政治経済学」が狭い意味でしか理解されてこなかった。ルソーの経済論を、その道徳、政治哲学から切り離すことの誤り。古代的な徳が不可能になった近代に利己的であることはそれ自体として過ちではない。真の本性を満足させるような快樂ではなく、社会的な基準を満足させるような快樂の追求することの誤り。

### コメント

サルヴァが説明する1755年から1762年にかけてのルソーの思想的転換では、その思想的核心が、個人道徳の議論に縮減されているように思われる。しかし、ルソーの著作は、たとえそれが空想的な性格をもっていたとしても、社会変革の構想と完全に切り離されるものと理解してよいのか。むしろ、問われるべきは、ルソーがいかなる歴史的スパンで、社会変容の在り方を想像していたのか、ではないか。

（『社会契約論』で提示される理念型、『ポーランド統治論』でのより具体的な改革案（相続法、選挙制度など）、『エミール』での「人間」に対する働きかけ。）そうした点を考慮した上で、改めて不平等、奢侈の問題を社会科学的な観点から評価すべきではないか。

内田義彦は、ルソーの『人間不平等起源論』での問題提起に対する応答としてスミス『道徳感情論』を解釈。そこでの、より具体的な商業社会と利己心の両立可能性に関する考察。サルヴァの議論を意味あるものとするためには、ルソーの問題提起が、同時代の思想家に与えた重要性を、さらに掘り下げるべきではないか。